

日本オーラル・ヒストリー学会第10回大会案内 大会プログラム

Japan Oral History Association 10th Annual Conference

開催日程：2012年9月8日（土）～9日（日）

開催場所：椋山女学園大学（星ヶ丘キャンパス）国際コミュニケーション棟

大会第1日目 9月8日（土）

理事会 10：30～12：00

受付開始 12：00 G階のピロティ

※受付にて9日（日曜日）のお弁当販売を受け付けます。

自由報告：12：30～15：30

第1分科会（417教室）

第2分科会（416教室）

第10回大会記念テーマセッション 15：40～18：00（418教室）

「日本のオーラル・ヒストリーの源流をたどる——地域女性史の歩みから」

報告 「地域女性史と聞き書き」（仮）

伊藤康子（愛知女性史研究会、元中京女子大学短期大学部教授）

コメント 山寄雅子（立教大学特任准教授、教育学）

司会 和田悠（日本学術振興会）

コーディネイト 山本唯人（政治経済研究所）

懇親会 18：15～20：15

場所：教育学部 E棟 F19（学食）

一般＝4,000円、大学院生＝2,500円

大会第2日 9月9日（日）

自由報告：9：00～12：00

第3分科会（417教室）

第4分科会（416教室）

総会：12：15～13：00（418教室）

昼食休憩（受付時予約または持参）：13：00～13：45

シンポジウム：14：00～17：00（509教室）

テーマ：語りから「いのち」について考える：聞き難いものを聞き、語り、書く

報告1 「災害のマスター・ナラティヴー「がんばろう」と“I love New York”」

やまだ ようこ（立命館大学）

報告2 「いのちを支える看護者の語り」

佐々木裕子（愛知医科大学）

報告3 「語りにくいこと—自死遺族たちの声—」

有末賢（慶應義塾大学）

司会 塚田 守（椋山女学園大学）

討論者 清水 透（前学会長）

山村淑子（理事、女性史家）

ご案内

1. 発表時間：

自由報告：報告30分程度※今回は発表者数が少なかったため、報告時間を増やしました。

シンポジウム：報告30分、コメント15分、フロア討論60分

2. 会場 椋山女学園大学 星が丘キャンパス

3. 大会実行委員会連絡先

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17-3 国際コミュニケーション学部塚田 守
研究室気付 電話：052-781-5143

E-mail:mamoru@sugiyama-u.ac.jp(入会および会費納入等に関する相談・問い合わせは日本
オーラル・ヒストリー学会事務局へ)

4. 大会参加費 学会員 無料、 学会員以外 一般 2,000円 学生 1,000

シンポジウム参加のみ 無料

5. 懇親会 9月9日(土) 教育学部 E棟 F19(学食)

一般=4,000円、大学院生=2,500円

6. 自由報告 一発表30分程度とします。発表時間を厳守してください。なお、レジ
ュメを用意される方は、50部程度ご用意ください。万一不足の場合、大会本部ではコピー
等致しかねますので、ご了承ください。

7. クローク 学会本部(509教室)に荷物をお預けください。

8. 会員休憩室 両日とも415教室。3階の学生控室には自動販売機などがあります。

9. 喫煙室 2階のエレベーターの近くの外に「喫煙コーナー」があります。それ以外
の場所ではすべて禁煙です。

10. 昼食 大会第2日目の昼食については、食堂が日曜日なので、学会参加者は前日
に弁当を申し込んでください。申込み者には引換券を渡します。総会の開始時にお弁当と
引き換えます。

11. 宿泊 基本的には各自で予約してください。地下鉄沿線なら30分以内に大学に着
くと思います。比較的近く安価なもの(6,000~7,000円前後)として2つの施設をご紹介します。

1. メルパルク NAGOYA 〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵3丁目 16-16

052-937-3535

2. ルブラ王山 〒464-0841 愛知県 名古屋市千種区覚王山通 8-18

052-762-3105

12. アクセス

椋山女学園大学ウェブサイト：<http://www.sugiyama-u.ac.jp/sougou/access.html>

報告タイトル

第1分科会 司会 小倉康嗣(417教室)

1. 文献資料散逸の補完としての聞き書き調査—1960年代のラジオ深夜放送を事例—(The
interviewees filling up the lost fragments in the historical documents—A case
study of the youth radio community emerged in the late 1960's in Nagoya—)
長谷川倫子(東京経済大学)

2. オーラル・ヒストリーが伝えるテレビドラマの黎明期～生放送時代の現場から～(Oral
History Enlightening the Dawn of Television Dramas: Behind the scenes of live drama
broadcasting)

廣谷鏡子(NHK放送文化研究所専任研究員)

3. 別子銅山社宅街（鹿森社宅）における昭和の生活史（Life in a copper-mining town “Shikamori” in Bessi Area, Niihama, Japan）
竹原信也（新居浜工業高等専門学校）
4. 神明社神楽の歴史と言説（The history and the discourse of Shinmeisha-kagura）
川崎瑞穂（国立音楽大学大学院）

第2分科会 司会 田代志門（416教室）

1. 統合失調症の子を抱える親たちの多様性（The diverse lived experience of parents of adult children diagnosed with schizophrenia）
青木秀光（立命館大学大学院）
2. 1970年代後半に心臓ペースメーカーを植え込んで職場復帰した男性の働くことの難しさ（Difficulties experienced by a male who returned to work following the implantation of a pacemaker in the late）
小林久子（藍野大学）
3. 米国の医療通訳発展を支えた医療通訳士のオーラル・ヒストリーより（Oral histories of pioneers who shaped medical interpreting history in the United States of America）
竹迫和美（国際医療通訳士協会）

第10回大会記念テーマセッション 15:40～18:00（418教室）

「日本のオーラル・ヒストリーの源流をたどる——地域女性史の歩みから」

開催趣旨：

JOHAが設立されてから、今年で10回目の大会を迎える。JOHAでは、昨年度、開催されたオーラル・ヒストリー・フォーラムの成果を引き継いで、これまでの歩みを振り返り、その足場がどこにあるのかを検証すると共に、この学会が、今後、オーラル・ヒストリーの発展にとって何をなすうのかを考え合う機会を設けたい。

そこで、本大会では、定例の研究実践交流会に代わる特別企画として、「第10回大会記念テーマセッション」を開催する。

テーマとして、日本におけるオーラル・ヒストリー実践の源流である、地域女性史のあゆみに焦点を当て、実践的学知としてのオーラル・ヒストリーがどのように始まったのか、その原点に含まれていた課題や豊かな可能性を再認識すると共に、そこから、オーラル・ヒストリーの現在の姿を逆照射し、その役割と将来へ向けた可能性を考えたい。

報告者として、1977年、本大会の開催地である名古屋から、女性史研究の全国的ネットワークである「女性史のつどい」の発足を呼びかけ、その後も、名古屋を拠点に、女性史研究を続けてこられた伊藤康子氏をお招きし、「女性史のつどい」が何をめざしたのか、そこでは、どのような女性たちのどのような経験が描かれたのか、方法や残された課題などについて、当事者の立場からご報告いただく。

コメンテーターを社会教育の現場にも関わりながら、近年、京都人文学園についてのご研究をまとめられた、教育学の山寄雅子氏にお願いする。

当日はフロア参加者も含めて、さまざまな視点・立場から、オーラル・ヒストリーの可能性や今後を語り合う機会としたい。多くの会員、関係者の方々の参加を期待する。

報告 「地域女性史と聞き書き」（仮）

伊藤康子（愛知女性史研究会、元中京女子大学短期大学部教授）

コメント 山寄雅子（立教大学特任准教授、教育学）

司会 和田悠（日本学術振興会）

コーディネイト 山本唯人（政治経済研究所）

懇親会 18:15~20:15
場所：教育学部 E棟 F19 (学食)
一般=4,000円、大学院生=2,500円

大会第2日 9月9日(日)

自由報告：9:00~12:00

第3分科会 司会 野本京子 (417教室)

1. 日系人オーラル・ヒストリー・インターネットサイトの利用方法——教育カリキュラムへの提言 (Nikkei Oral Histories on the Internet Can Go a Long Way: Suggested Use in Classroom)

山本 恵里子 (移民史研究者・大学講師)

2. オーラル・ヒストリーの著者性(authorship)をめぐる (Authorship in Oral History)
加瀬豊司 (四国学院大学名誉教授)

3. 移住労働者とその関与者の語りから見た日本語習得の促進要因 (Factors, promoting Japanese language acquisition, examined through a narrative of migrant workers and consociates)

吹原 豊 (福岡女子大学)

第4分科会 司会 滝田祥子 (416教室)

1. パレスチナ難民問題の歴史記述における文字資料と証言の位置 (Positions of Written Documents and Testimony in the Historiography on the Palestinian Refugee Problem)
金城美幸 (立命館大学ポストドクトラルフェロー)

2. ハンセン病に罹患した一人の捕虜の目を通じて見たカウラ事件 (Cowra Breakout Seen Through a Prisoner of War Who Suffered from Hansen's Disease)

山田 真美 (お茶の水女子大学大学院)

3. 戦争体験を語りつぐストーリーの分析 (Narrative analysis of the wartime experiences conveyed to others)

桜井 厚 (立教大学)

総会 12:15~13:00 (418教室)

昼食休憩 (受付時予約または持参)：13:00~13:45

シンポジウム：14:00~17:00 (509教室)

テーマ：語りから「いのち」について考える：聞き難いものを聞き、語り、書く

テーマ設定の趣旨：

身近な人、深くかかわった人を失う経験を持ち、人は死と向かい合い、初めて「いのち」について考えるのではないか。残された者が「失われたいのち」と関わる時、「いのち」について語り始め、生きていく意味について考え、いまの自分を再考するのではないか。このシンポジウムでは、3つの異なった分野のパネリストがそれぞれの立場から、残された者の「いのちについての語り」について、議論する予定である。

第1のパネリスト、やまだようこ氏は、『喪失の語り』を書き、残された者がどのように死者とともに生きるかをテーマとしてきた。今回は、東日本大震災3.11のあとの「がんばろう、日本」を、アメリカ同時多発テロ9.11のあとの“I love America”と比較しながら、人は、どのようにして喪失から生成へと変換していくのか、「ナラティブ(語り・物語)」の働きについて議論する。

第2のパネリスト、佐々木裕子氏は、在宅看護を中心として死に至る人々のいのちを観てきた看護師としての経験を中心として、患者が死と向かい合う中で、本人の「病いの語り」がどのように話され、生きる意味付け行為に関わるかについて述べ、身内が死に至る過程での家族や看護師の関わりはどのようなものかについて、看護師としての実践経験として、医療における語りの意味について語る。

第3のパネリスト、有末賢氏は、「自死の遺族の会」に深く関わり、フィールド調査をしている経験を中心にして、ある日突然、自らのいのちを絶った身近な人に深く関わり、残された者の意識について、社会学者の立場から論じる。自死の遺族たちは、その死について積極的に語るというよりはむしろ、隠すことが多いと言われている。ただ、同じ経験を共有できる「遺族の会」では、彼らは積極的に語る傾向がある。「遺族の会」で語られる語りとはどのようなものか、それを語る意味などについて論じる。

報告1 「災害のマスター・ナラティヴー「がんばろう」と“I love New York”」

やまだ ようこ (立命館大学)

報告2 「いのちを支える看護者の語り」

佐々木裕子 (愛知医科大学)

報告3 「語りにくいこと―自死遺族たちの声―」

有末賢 (慶應義塾大学)

司会 塚田 守 (相山女学園大学)

討論者 清水 透 (前学会長)

山村淑子 (理事、女性史家)